尾鷲警察署協議会議事録

令和４年度第３回尾鷲警察署協議会	
日　　時 場　　所	令和４年12月15日（木）午後　２時～午後　３時30分 尾鷲警察署３階大会議室
出 席 者	１　警察署協議会委員　４名 榎本隆吉委員、北裏佳代委員、西岡利行委員、服部敬委員 ２　警察署　７名 署長、副署長、生活安全課長、地域課長、交通課長、警備係長、警備係長
傍聴者数	なし
公開・非公開の別	公開

議　事　概　要

１　警察署長挨拶

２　災害対策活動の紹介

レスキューフォース実演（警備係長）

３　協議内容

⑴　災害対策について

＜委員＞　災害が発生した際、救助を待つまで生き延びるためには、どうすればよいか。

【署長】　高所に避難することが重要である。

高所であれば、ヘリコプターから発見され、早く救助してもらえる可能性が高くなる。

＜委員＞　広範囲の災害が発生した場合、被災地の全てに救助隊が赴くことは難しいと思う。

地域住民が、自分たちで生き延びることが必要なのではないか。

【署長】　地域で力を合わせることが重要である。

また、水や避難場所の確保等、地域によって特色があるので、地区の事情に合わせた避難方法をシミュレーションすると良い。

＜委員＞　避難時に車を使用した方が良いのか。

【署長】　必ずしも車での避難が推奨されているわけではない。

実際に被災地では、道路上に残された車が通行の妨げになっていることや、車の中に人が取り残されて逃げ遅れたこともある。

しかし、避難場所では、車があることでプライベートスペースを確保できるなど、心理的に良い面もある。

＜委員＞　尾鷲市の中でも、住んでいる場所によって災害に対する意識が違う。

海側に住んでいる人たちは、子供の頃から『地震が起きたら山に登れ』と教わり、津波が来たら家が流されるという意識がある。

一方、山側に住んでいる人たちは、『津波があったら私の家に来たらいい』と言っているが危機感が無いのではないか。

【署長】　山に避難する伝統があるのは、大変素晴らしいので、今後も続けてほしい。

また、『家に来い』という言葉は、助け合い精神の表れだと感じる。

人のつながりが強い尾鷲ならではの言葉であり、都心部ではそのような助け合いは難しいと思う。

助け合いができるという地域性の良さにも、目を向けてほしい。

⑵　防犯対策について

＜委員＞　尾鷲は平和であることが自慢である。

昔から家の鍵はかけない文化があるので今後も鍵はかけなくてもよいのではないか。

【署長】　『鍵かけ防犯』という言葉があり、今は２ロックが常識である。

防犯対策上、家の施錠はしていただきたい。

しかし、『地域の目』は、鍵かけ防犯以上の防犯効果がある。

人の輪が強い尾鷲であれば可能だと考える。

是非、尾鷲の地域が持つ力を、防犯に活かしてほしい。

＜委員＞　テレビで、防犯カメラ映像が決め手となり賽銭泥棒が逮捕される様子が放送されていた。

尾鷲管内でも、同様の方法で賽銭泥棒が逮捕されているのか。

【署長】　防犯カメラ映像から犯人を割り出す手法は、賽銭泥棒に限らず、様々な犯罪の犯人逮捕に活用されている。

⑶　交通安全について

＜委員＞　高齢者を含めた弱者に優しい町作りをしてほしい。

高齢者の危ない横断を減らすためには、信号機や横断歩道の設置場所を高齢者が利用しやすいように変える必要があるのではないか。

【署長】　様々な観点からの高齢者対策が必要であり、警察も引き続き施策を講じていく。

しかし、弱者に優しい町を実現するには警察だけでなく、全ての人が意識することが重要である。

信号機等の交通環境の整備も重要ではあるが、まずは車を運転するドライバーに高齢者に配慮する意識を持たせることが必要だと考えている。

備　　考	報道機関１社１名